



Title	内モンゴル自治区における日本語専攻学習者の動機づけに関する調査 : 学年による違いを中心に
Author(s)	張, 立偉
Citation	大阪大学言語文化学. 2017, 26, p. 85-99
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/62198">https://doi.org/10.18910/62198</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 内モンゴル自治区における日本語専攻学習者の 動機づけに関する調査

—学年による違いを中心に—\*

張 立偉\*\*

キーワード：日本語専攻学習者、動機づけ、学年

众所周知，中国的日语教育在近几年不断取得发展，不光是在日语学习者的人数上，在日语教师的人数以及日语教育机关的总数上都取得了很大的发展。根据2012年国际交流基金会的调查显示，中国日语学习者的总人数已经超过韩国，成为世界第一。同时，根据同调查显示，在大学学习日语的学习者人数最多，占整体日语学习者人数的64.9%。但是蓬勃发展的日语教育中也存在着各种各样的问题，同样根据2012年国际交流基金会的调查显示，日语学习者的学习不热心在众多问题中占第二位。

为了解决日语学习者学习不热心的问题，需要首先调查日语学习者的学习动机的问题，因为学习动机和学习者的不热心问题有着密切的关系。为了调查日语学习者的学习动机，本论文以位于中国内蒙古自治区的A大学的日语系的学习者为调查对象，对日语学习者的学习动机进行了问卷调查。

通过这次问卷调查显示，日语学习者中因为对日本的文化等等感兴趣而开始日语学习的人数众多，这种内在型学习动机对日语学习者的学习产生了重大的影响。同时，为了以后的升学以及就业而选择日语的外在型学习动机也在日语学习者的学习中起着不可忽视的作用。同时，日语学习者虽然保持着很高的学习动机在进行日语学习，但是随着日语学习者年级的增高，为了测试日语学习者的周围环境对日语学习者影响的「周围环境」一项的平均值不断增高，与此同时，测试日语学习者的信心和努力的「学习语言的自信程度」和「学习努力程度」两项的平均值却不断降低。

在中国，进入大学才开始日语学习的学习者人数众多，因此日语教育的课程设置对日语学习者的影响可想而知。同时，通过预备调查也显示，现在的中国日语教育的课程设置上存在着很大的问题的同时，正式调查的结果也显示不仅日语学习者的自信以及努力程度会随着学习者的年级的增长而不断下降，日语学习者的学习动机也会随着年级的增长而发

---

\* 关于内蒙古自治区日语专业学习者的学习动机的调查

—以学习者的年级为中心—

张立伟 (Zhang Liwei)

\*\* 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

生変化。

通过本次问卷调查显示，日语教育的课程并不是在特殊阶段出现问题，比如一年的课程设置或者二年级的课程设置等等，而是日语课程设置整体都出现问题。因此在需要对日语课程设置的整体情况进行调查的同时，也需要了解各个年级日语课程设置的具体情况。同时，在考虑日语教育课程设置的时候，需要考虑到日语学习者的学习动机的变化。

## 1 はじめに

周知のように、日本語教育は世界各国で盛んに行われており、特に中国では学習者が年々増えてきている。日本の独立行政法人国際交流基金の2012年の調査によれば、中国における日本語学習者数は韓国を追い抜き、世界一となった。また、同調査により、高等教育で日本語を学習している学習者数は中国における日本語学習者数全体の64.9%を占めている。その中には日本語を専攻として学習している学習者もいれば、日本語を第二外国語として学習している学習者もいる。しかしながら、このように盛んに行われている日本語教育にまだ様々な問題が存在している。同じ国際交流基金の2012年の調査から、日本語教師の待遇や日本語学習者の減少など、様々な問題が存在しており、その中で教材不足、学習者不熱心と施設・設備不十分の3つが問題の上位三位を占めていることがわかる。

以上の問題点を踏まえて、本稿では日本語教育に存在している問題の中で第2位である学習者不熱心の問題について中国内モンゴル自治区のA大学を例に、検討を行ってみたい。まず、内モンゴル自治区における日本語専攻学習者の動機づけの傾向を明らかにした上で、学年別で日本語専攻学習者の動機づけの傾向を明らかにする。次に、日本語専攻学習者の学年によって動機づけに差が生じているかを検証した上で、その原因について検討を行う。以上の目的を達成するために、本稿では中国内モンゴル自治区におけるA大学の日本語学科に在籍する日本語専攻学習者の一年生から三年生までの学習者を対象に、動機づけについてアンケート調査<sup>1</sup>を行った。その本調査の結果に基づいて分析を行っていく。

## 2 先行研究と本研究の目的

本研究では、まず「学習者不熱心」の「熱心」について定義しておきたい。「熱心に勉強する」や「学習に熱心である」というフレーズは誰でも聞いたことがあるだろう。教育心理学では学習者の「熱心」を「動機づけ」と定義づけている。

教育現場に立つ者なら、誰でも学習者が学習を始めようと思った理由について考えた

<sup>1</sup> 本稿では本調査と呼ぶ。

経験があるだろう。その理由をいかに維持しながら、最終の目標に近づかせるかは教師が直面しなければならない問題であろう（守谷 2002）。動機づけは第二言語学習においては学習者を目標に導く重要な要因の一つであると考えられる（Oxford 1996）。Dörnyei（1998）は十分な動機づけなしでは、最も長期の学習目標を達成することはできないと述べている。

また、第二言語習得における学習者の動機づけの研究は Gardner らによって始められ、彼らを中心に進められてきた。Gardner and Lambert（1972）は学習者の動機を道具的動機づけ（instrumental motivation）と統合的動機づけ（integrative motivation）に分類している。統合的動機づけとは目標言語の社会や文化などに興味があり、また、その社会に溶け込みたいという学習動機であるのに対し、道具的動機づけとは、入学や旅行のため、また、就職のためといったような目標言語をあくまでも道具の一種として学習する動機である。また、Gardner（1985）は道具的動機づけより統合的動機づけのほうが言語学習に有効であると強調している。しかしながら、その一方でインドで英語を学ぶ高校生を研究対象とした Lukmani（1972）は道具的動機づけが高い学習者のほうが言語習得度が高いとしている。このように、統合的動機づけと道具的動機づけのどちらが言語学習に有効であるかについて、未だに一致した結論に至っていない。このようなことから、言語学習動機をめぐる議論は、必ずしも Gardner の意向を反映したものではないにせよ、「統合的」「道具的」のいずれの志向を持った学習者のほうが言語の到達により有効かという方向に発展していった（守谷 2002）。

他に、Deci&Ryan（1985）は学習動機を内発的動機づけと外発的動機づけに分類している。内発的動機づけは英語学習そのものに興味を持ち、また、英語を使って人と交流したいという動機づけである。それに対し、外発的動機づけは報酬や試験、資格のために学習する動機づけである。また、内発的動機づけと外発的動機づけは相容れない存在ではない。その関係性について、Deci&Ryan の自己決定理論（Self-Determination Theory: Deci&Ryan, 1985 ; Deci&Ryan, 2000）などが挙げられる。自己決定理論は外発的動機づけと内発的動機づけを一次元上の両極として捉えており、外発的動機づけから内発的動機づけへと移行のプロセスを自己決定性の程度によって、「無動機」（amotivation）、「外的調整」（external regulation）、「取り入れ的調整」（introjected regulation）、「同一化的調整」（identified regulation）と「内発的動機づけ」との 5 つの段階に分類している。言語学習者が言語学習をどのように捉えるかによって、動機づけが常に揺れ動いている。その一方で、自己決定理論に関する研究には問題点が存在していると岡田（2006）が指摘している。岡田は今まで自己決定理論研究に関する研究の問題点を、以下の 2 点にまとめている。一つ目は各動機づけごとに他の要因との関連を検

討した研究は多くなされているが、個人が実際にどのような動機づけのパターンを有しているかが明確にされていないことである。二つ目は自己決定理論に関する研究の多くは質問紙を用いた関連研究が主流であり、実験的な手法を用いて各動機づけを扱ったものがほとんど存在せず、これまで、質問紙を用いた調査研究によって、動機づけと行動や感情との関連について検討がなされてきたが、動機づけが行動や感情に及ぼす影響という因果関係について積極的な言及をするためには、実験的な手法を用いた研究を行う必要があることである。

一方で、中国では中国人日本語学習者の動機づけを対象とした研究はまだ少ないと言わなければならない。劉（2009）によれば、1999年から2008年の間に、中国で日本語教育に関する研究はさまざまな分野で行われている。特に、日本語カリキュラムと改革についての研究は最も多く、研究全体の22.73%を占めている。その次は日本語知識教育（音声、ボキャブラリー、文法、歴史、文化）と日本語能力教育（聞く、話す、読む、コミュニケーション）についての研究であり、それぞれ全体の20.45%と13.64%を占めている。中国では日本語に関するカリキュラム、日本語の知識と4つのスキルに関する研究が最も盛んに行われていることが分かる。しかしながら、日本語教師や日本語学習者を対象とした研究は少なく、全体のわずか3.41%（6本）を占めているだけである。この6本の中で、学習者を対象とした研究は3本で、2本は語彙習得に関する研究、学習者の動機づけに関する研究は1本のみであった。残りのうち2本は教師が教室でどのような役割を果たしているかに関するものだった。

また、田中（2015）は中国の日本語教育の主要学術雑誌である「日本語学習と研究」<sup>2</sup>に投稿された1979年から2012年までの33年間の日本語教育に関する210本の論文をまとめて、中国における日本語教育に関する研究の傾向を見ている。210本の論文のテーマは多岐に渡り、中でも日本語そのものの研究や日本語の教授法などをテーマとした論文が最も多かった。しかしながら、その中には日本語専攻学習者の動機づけをテーマとした論文はなかった。

以上の先行研究から学習者の動機づけは言語学習において大事な役割を果たしているにも関わらず、中国では日本語学習者の動機づけに関する研究はそれほど進んでいないことがわかる。

そのため、本稿ではまず日本語専攻学習者の動機づけの傾向を明らかにした上で、学年が上がるにつれて学習者の動機づけの変化を描き出す。また、学年によって学習者の動機づけに差が生じているかについても検討を行いたい。それと同時に、日本語学習者

---

<sup>2</sup> 原文：日语学习与研究

の日本語学習に対する「不熱心」が生じる原因についても考察をしたい。

### 3 調査

#### 3.1 予備調査

筆者は中国における中級日本語専攻学習者の動機づけの傾向を確認するために、2011年4月に、中国内モンゴル自治区に位置するA大学を例に、A大学日本語学科の在籍生を対象に予備調査を行った。A大学日本語学科三年生に在籍する78名の学習者に「日本語学習に対する意欲は喪失しているか」という質問をしたところ、図1が示しているように、78名のうち、68人が「はい」と答えている。また、「はい」と答えた学習者にその理由を答えてもらった。

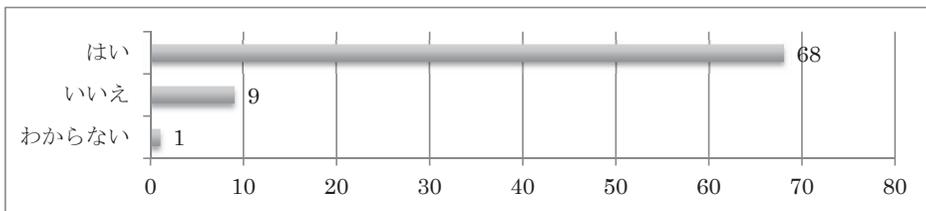


図1 学習者の回答数

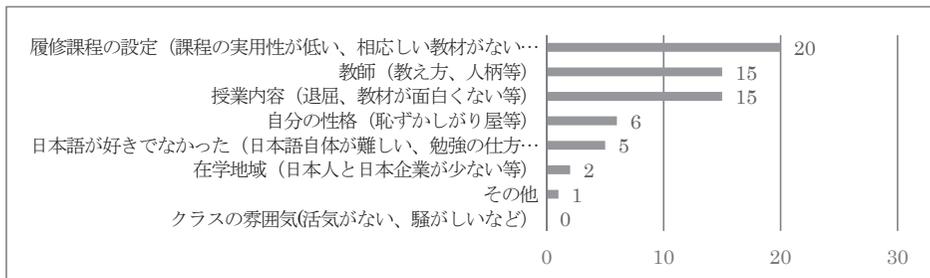


図2 日本語に対する学習意欲を喪失する理由

図2が示しているように、日本語専攻学習者の回答は多岐にわたっているが、日本語履修課程の設定 (課程の実用性が低い、相応しい教材がない) や授業の内容 (退屈、教材が面白くないなど) などが学習者の動機づけに影響を及ぼしていると同時に、日本語履修課程などに問題も存在していることがわかった。

履修課程の設定や授業の内容などが日本語カリキュラムに関わる項目であり、今回の予備調査を通して、日本語カリキュラムに問題があると言えよう。しかしながら、今回の予備調査の対象は日本語専攻学習者の三年生であり、彼らは日本語専攻教育を三年間受けているため、日本語カリキュラムは特定の段階に問題が生じているか、または、日

本語カリキュラムそのものに問題があるのかは予備調査だけでは確認できない。また、予備調査の対象は日本語専攻学習者の三年生のみであったため、日本語専攻学習者全体の動機づけを把握することもできなかった。以上の問題点を踏まえて、本稿では以下の2つを目的とする。一つ目は日本語専攻学習者全体の動機づけを把握するために、A大学の日本語学科に在籍している日本語専攻学習者の一年生から三年生を対象に本調査を行うことである。二つ目は日本語カリキュラムのどこに問題が生じているかまたは、日本語カリキュラムそのもの自体に問題があるかを確認するために、同じA大学の日本語学科に在籍している日本語専攻学習者の動機づけを学年ごとに明らかにした上で、学年が上がるにつれて、日本語専攻学習者の動機づけに差が生じているかを確認することである。

### 3.2 本調査

日本語専攻学習者の動機づけの変化を検証するために、筆者は2013年9月22日から9月26日まで、A大学外国語学部日本語学科に在籍する日本語専攻学習者を対象に本調査を行った。本調査は研究以外には使わないことと成績などに一切関係ないことを授業の前に教師に伝えてもらい、学習者の許諾を得た上で授業後に実施した。

#### 3.2.1 A大学

A大学は中国内モンゴル自治区のフフホト市にある総合大学であり、1957年に中国国家教育部により創立された。A大学は内モンゴル自治区において初めて少数民族自治区で設立された大学であり、A大学は内モンゴル自治区の教育を牽引する大学であると言っても過言ではない。現在、A大学はモンゴル学を始め、経済学部や外国語学部など21学部が設置され、学部生や院生を毎年7000人程度受け入れている。

A大学日本語学科は1979年に設置され、A大学外国語学院とともに発展し、2013年まで、34年の歴史を築いている。現在のA大学日本語学科においては学習者の数も教師の数も30年前より大幅に増えてきた。日本語に関する授業の種類も豊富になっている。それと同時に、教育手段もデジタル化され、パワーポイントなどのプレゼンテーションツールを使いながら、授業を進めるのが主流となっている。現在、A大学の日本語学科には教師が20人おり、その内、教授は3人、准教授は6人、博士号を持っている教師は8人である。中国人の日本語教師全員が日本で学習した経験があり、日本の大学を卒業した教師も少なくない。また、中国人の教師のほかに日本人の教師は4人であり、学年ごとに1人の日本人の教師が日本語の会話を担当している。A大学は学生の日本語の能力を高めるために、さまざまな努力をし、よりよい学習環境や教師を提供している。

A 大学日本語学科では、漢民族とモンゴル族に分けて日本語教育が行われている。現在、1 学年に 3 つのクラスが設置され、その内、漢民族クラス 2 つ、モンゴル族クラスは 1 つである。1 つのクラスに学生数は 30 人程度で、基本的には同じクラスメンバーの持ち上がりで進められる。

A 大学日本語学科は日本語教育の歴史も古く、教師数や学習者数も日本語を専攻として設置している大学の中では最大規模の大学であるため、内モンゴル自治区の日本語教育の現状を確認するのにふさわしいと考え、今回の調査対象にした。

### 3.2.2 調査協力者

本研究の調査協力者は中国内モンゴル自治区に位置する A 大学の日本語学科の一年生から三年生までである。四年生は就職活動のため学校にきていなかったため、今回の研究対象者から除外した。また、調査協力者の内訳は表 1 にまとめた。

表 1 調査協力者の内訳

	一年生	二年生	三年生	計
漢民族	34 人	39 人	26 人	99 人
モンゴル族	28 人	31 人	21 人	80 人
計	62 人	70 人	47 人	179 人

### 3.2.3 調査用紙

本研究で使う本調査用紙は 3 つの部分から構成されている。まずは背景調査である。日本語専攻学習者のバックグラウンドが学習者の動機づけに影響を及ぼしているかを確認することも本研究の目的の一環であるため、調査協力者の親の仕事、学歴、兄弟の有無などのような家庭状況についての情報を質問紙に入れた。次は本調査の本文である。本文は「内発的動機づけ」、「外発的動機づけ」と「独立項目」の 3 つのカテゴリーから構成されており、計 63 問である。「内発的動機づけ」は「文化的興味関心」、「国際交流」、「第二言語コミュニティに対する態度」、「外国語に対する興味」と「日本語に対する態度」の 5 つのサブカテゴリーから構成されているのに対し、「外発的動機づけ」は「身辺環境」、「親からの励まし」と「道具的意識」の 3 つのサブカテゴリーから構成されている。「独立項目」は「第二言語における理想像」、「第二言語習得に関する自信」と「学習努力」の 3 つのサブカテゴリーから構成されている。この 11 のサブカテゴリーは Ryan (2009) を参考に作成した。Ryan の調査法は質問紙調査の一つの有力な方法と見なされているため、本研究では、Ryan に基づいて本調査用紙を作成した。Ryan は日本で英語を学習する日本人学習者を対象に、アンケート調査を行っている。アンケート調査は計 100 問

であるが、本研究の中では、日本語学習者の動機づけを確認することが目的であるため、100問の中から、背景調査の37問を除き、動機づけを調査する63問を選び出した。最後は自由記述である。本研究では日本語学習者の学習動機を検討するために、質問紙に「日本語を始めた理由」と「将来、どんな自分像を想像しますか。それに対する努力をしますか」との2問の自由記述問題を設けた。

### 3.2.4 信頼性分析

質問紙に前述の11のサブカテゴリーを含んだ質問群を用いた。全質問項目にはリッカートの尺度（1強く思う2そう思う3どちらでもない4そう思わない5まったくそう思わない）を使用し、当てはまる程度が強いほど得点が高くなるように、1から5までの得点を割り当て、データを集計した。本稿では、クロンバックの $\alpha$ 係数が0.7を下回り十分な信頼性を得られなかった「外国語に対する興味」という項目を除いた残りの10のサブカテゴリーを検討することにした。

## 4 分析

ここでは本調査の結果の分析を行いたい。まず、日本語専攻学習者の全体の動機づけの傾向を見てから、学年ごとの動機づけの傾向を検討する。次に、学年による学習者の動機づけに差が生じているかを検証した上で、学習者の学習不熱心の原因について考察をしたい。

### 4.1 日本語学習者の動機づけの傾向

まず、日本語専攻学習者の全体の動機づけの傾向を見てみる。

表2 日本語専攻学習者の動機づけの傾向

項目	M (平均値)	SD (標準偏差)
文化的興味関心 <sup>3</sup>	3.92	0.59
第二言語コミュニティに対する態度	3.73	0.68
道具的意識	3.61	0.58
国際交流	4.14	0.69
日本語に対する態度	3.65	0.72
身辺環境	2.79	0.64
親からの励まし	3.33	0.77
第二言語における理想像	3.92	0.70
第二言語習得に関する自信	3.21	0.73
学習努力	3.74	0.63

表2が示しているように、全体傾向として、「自分の周りには外国語ができることはいいことだと思っている人が多い」や「今の私の環境では日本語が大事だ」などを表す「身辺環境」(M=2.79, SD=0.64)の変数だけは「どちらでもない」を表す「3」を下回っており、その後に「自分は外国語の習得に自信がある」を表す「第二言語習得に関する自信」(M=3.21, SD=0.73)と「両親は私が日本語を学ぶべきだと考えている」や「両親は私の日本語学習に協力的だ」などを表す「親からの励まし」(M=3.33, SD=0.77)が続いた。「身辺環境」は学習者の周りが学習者にどれほど影響を与えているかを測る項目であり、「身辺環境」は「どちらでもない」を表す「3」より低いいため、学習者の周りには、日本語学習が大事だと思っている人が比較的少ないことを意味している。また、「親からの励まし」は「どちらでもない」を表す「3」程度であり、学習者の学習動機に親の励ましが非常に大きく関与しているわけではないことが分かった。成田(1998)は学習者が周りから影響を受け、学習を始めるという誘発志向が学習者に影響を与えると述べているが、本調査では、学習者は周りや親からそれほど影響を受けていないことが分かった。また、すべての変数の中で、「日本語を使って日本人と交流したい」という「国際交流」(M=4.14, SD=0.69)が最も高く、その後に、「日本語を話せるようになって自分をよく想像する」や「自分が日本人の友達と日本語で話しているのをよく思いうかべる」などを表す「第二言語における理想像」(M = 3.92, SD=0.70)と「日本の文化に興味・関心がある」という「文化的興味関心」(M=3.92, SD = 0.59)が続いた。従って、日本語専攻学習者にとっては、日本語を学習して、日本人と交流したい意欲が高く、また、日本語専攻学習者は日本の社会や文化などに高い興味・関心を持っている内発的動機づけが高いことが分かった。

#### 4.2 学年ごとの日本語専攻学習者の動機づけの傾向

ここでは日本語専攻学習者の動機づけを学年ごとに検討し、顕著な傾向を考察する。

日本語専攻学習者の一年生の動機づけの傾向は日本語専攻学習者の全体の傾向と似ており、「国際交流」(M=4.10, SD=0.73)は最も高く、その次に、「文化的興味関心」(M=3.94, SD=0.56)と「第二言語における理想像」(M=3.92, SD=0.71)が続いた。一年生は日本語をただの道具として学ぶというより、日本語を使って日本人や外国人との交流や日本の文化や音楽などに興味があって日本語学習を始めた傾向が強いと言えよう。

表3が示しているように、日本語専攻学習者の二年生の動機づけも日本語専攻学習者の全体の傾向と似ており、日本文化や日本の音楽などに興味を持って日本語学習を始め

<sup>3</sup> 本稿では注目する項目と有意差のある項目を示すために、太字にした。

表3 学年ごとの動機づけの傾向

項目	一年生	二年生	三年生
文化的興味関心	3.94 (0.56) <sup>4</sup>	3.90 (0.64)	3.89 (0.59)
第二言語コミュニティに対する態度	3.59 (0.75)	3.84 (0.60)	3.74 (0.70)
道具的意識	3.54 (0.61)	3.60 (0.53)	3.70 (0.61)
国際交流	4.10 (0.73)	4.16 (0.73)	4.14 (0.57)
日本語に対する態度	3.75 (0.76)	3.60 (0.70)	3.58 (0.71)
<b>身辺環境</b>	<b>2.66 (0.61)</b>	<b>2.76 (0.64)</b>	<b>3.02 (0.65)</b>
親からの励まし	3.32 (0.78)	3.39 (0.74)	3.27 (0.79)
第二言語における理想像	3.92 (0.71)	3.88 (0.73)	3.98 (0.64)
<b>第二言語習得に関する自信</b>	<b>3.35 (0.83)</b>	<b>3.07 (0.76)</b>	<b>2.83 (0.73)</b>
<b>学習努力</b>	<b>3.96 (0.60)</b>	<b>3.67 (0.54)</b>	<b>3.56 (0.70)</b>

た傾向が強い。しかしながら、日本語専攻学習者の一年生と比べると、「身辺環境」(M=2.76, SD=0.64)の平均値が高くなり、一年生より二年生のほうが周りから日本語学習を促されていると言えよう。また、「第二言語習得における自信」(M=3.07, SD=0.76)と「学習努力」(M=3.67, SD=0.54)において、二年生のほうが平均値が低く、日本語学習に関する自信が二年生のほうが低く、また、学習において最も大事と思われる「学習努力」は一年生に比べて二年生のほうが自分の努力が足りないと認識していると言えるだろう。

また、日本語専攻学習者の三年生の動機づけの傾向も日本語専攻学習者の全体の傾向と似ており、日本語を単なる道具として学ぶより、外国人とコミュニケーションを取るために、日本語を学習する傾向が強い。しかしながら「第二言語習得における自信」(M=2.83, SD=0.73)と「学習努力」(M=3.56, SD=0.70)について、三年生の平均値は最も低く、学年が上がるにつれて、学習者の自信が低下しており、学習努力に対する認識は3つの学年の中で最も厳しいと言えよう。その一方で、一年生と二年生に比べて、三年生は「身辺環境」(M=3.02, SD=0.65)の平均値は初めて「どちらでもない」を表す「3」を超えており、3つの学年の中で、三年生は最も周りの意見などを気にしていることが分かった。

#### 4.3 学年による動機づけの違い

前節では日本語専攻学習者全体の動機づけの傾向を明らかにしたと同時に、学年ごとに日本語専攻学習者の動機づけの傾向についても分析をした。日本語専攻学習者は日本

<sup>4</sup> 値は平均値と標準偏差を示している。

語をただの道具として学習しているのではなく、日本の文化や日本の音楽などに魅力を感じ、また、日本人や外国人とコミュニケーションを取りたいため、日本語学習を始めたといったような内発的動機づけが高いことが分かった。その一方で、将来、日本語を使って仕事したいという外発的動機づけも日本語専攻学習者の学習に影響を与えていることも分かった。

また、学年ごとの動機づけの傾向を検証したところ、日本語専攻学習者は内発的動機づけが高いまま、日本語学習に臨んでいると同時に、学年が上がるにつれて、「身辺環境」の平均値が上昇しているのに対し、「第二言語習得における自信」の平均値や「学習努力」の平均値が低下している。本節では学年によって、10のサブカテゴリーにおいて、日本語専攻学習者の動機づけに差が生じているかを検証したい。

表 4 学年による動機づけの違い

項目	F	numdf	denomdf	p-value
文化的興味関心	0.086	2	111.052	0.918
第二言語コミュニティに対する態度	2.219	2	106.506	0.124
道具的意識	0.877	2	107.274	0.419
国際交流	0.146	2	114.863	0.864
日本語に対する態度	1.005	2	110.19	0.369
<b>身辺環境</b>	<b>4.376</b>	<b>2</b>	<b>109.391</b>	<b>0.015</b>
親からの励まし	0.349	2	108.864	0.706
第二言語における理想像	0.305	2	113.082	0.738
<b>第二言語習得に関する自信</b>	<b>5.977</b>	<b>2</b>	<b>111.235</b>	<b>0.003</b>
<b>学習努力</b>	<b>6.311</b>	<b>2</b>	<b>104.761</b>	<b>0.003</b>

学年による動機づけに差があるかを検証するために、一元配置分散分析 (onewaytest、有意水準 0.05) を行った。「身辺環境」(F=4.376, numdf=2, denomdf=109.391, p-value=0.015) と「第二言語習得に関する自信」(F=5.977, numdf=2, denomdf=111.235, p-value=0.003) と「学習努力」(F=6.311, numdf=2, denomdf=104.761, p-value=0.003) との3つの項目に有意差が見られた。

「身辺環境」は日本語専攻学習者の周りには日本語学習に対して積極的かどうか、また、日本語専攻学習者に日本語学習を促しているかどうかを測る項目であり、日本語専攻学習者は学年が上がるにつれて、「身辺環境」の平均値が上がっている。日本語専攻学習者は日本語を使って日本人と交流したいといった内発的動機づけを持っている一方で、日本語を使用し、就職したいという外発的動機づけも持ち合わせているため、日本語専攻学習者は学年が上がるにつれて、就職を迫られ、自分からだけではなく、周りからも

日本語学習を促されているようになっていいると考えられる。

また、「第二言語習得に関する自信」は日本語専攻学習者が言語学習に自信があるかどうかを測る項目であり、日本語専攻学習者の学年が高いほど平均値が低いということが分かった。日本語専攻学習者は学年が上がるにつれて、日本語を学習する自信を喪失していることが分かった。予備調査の結果から分かるように、日本語カリキュラムが最も影響を与えていると考えられる。

「学習努力」は日本語専攻学習者が日本語を努力して学習しているかどうかを測る項目であり、その平均値は日本語専攻学習者の学年が上がるにつれて年々低下しており、日本語専攻学習者は学年が上がるにつれて、「努力」に対する意識が高くなり、日本語学科に入学した当初に比べて、現在の学習において努力が足りないと認識していると言えよう。

#### 4.4 学年間の比較

前述のように、「身辺環境」、「第二言語習得に関する自信」と「学習努力」の3つの項目において学年による差が見られたが、さらに、3つの学年の間ではどこに差があったかを検証するために、多重比較（Holmの方法、有意水準0.05）を使用し、検証を行った。検証をするために、一年生、二年生と三年生を「1」「2」「3」で表すことにする。

表5 学年間の比較

	身辺環境		第二言語習得に関する自信		学習努力			
	1	2	1	2	1	2		
2	0.0327 <sup>5</sup>	—	2	0.094	—	2	0.0135	—
3	0.001	0.07	3	0.002	0.094	3	0.0022	0.3252

表5がそれぞれに示しているように、「身辺環境」において、一年生と二年生の間に、また、一年生と三年生の間に有意差が見られた。それに対し、「第二言語習得に関する自信」において、一年生と三年生の間に有意差が見られた。最後に、「学習努力」において、一年生と二年生の間に、また、一年生と三年生の間にも有意差が見られた。

#### 5 結論と今後の課題

今回の本調査を通して、日本語専攻学習者全体の動機づけの傾向として、日本語専攻学習者は日本語をただの道具として学んでいるのではなく、日本の文化や音楽などに興

<sup>5</sup> 値は p-value を示している。

味を持って、日本語学習を始めたという内発的動機づけが高いことが確認できた。また、その一方で将来、日本語を使用し、就職や進学などのために、日本語学習を始めたという外発的動機づけも持ち合わせていることも分かった。

また、日本語専攻学習者の動機づけが学習者の学年が上がるにつれて変化しているかについて、本調査を通して以下の二つのことが分かった。まず、日本語専攻学習者は学年が上がるにつれて就職からの圧力を感じ、学習者自身だけではなく、学習者の周りからも日本語学習を勧められるだろうと考えられるため、「身辺環境」という項目の平均値が上がっていると予測される。また、日本語学習を進められているにも関わらず、日本語専攻学習者は日本語学習に自信があるかどうかを測る「第二言語習得に関する自信」と学習に最も重要であると思われる「学習努力」との両方の平均値は学年が高いほど下がっている。

中国では、大学に入って日本語学習を始めた学習者がほとんどであり、大学の日本語カリキュラムの下で日本語を学習しているケースが多い。予備調査を通して、中級日本語専攻学習者の動機づけが低下しており、その主な原因は日本語カリキュラムにあることが確認できた。しかしながら、中級日本語専攻学習者はすでに日本語教育を三年間受けているため、予備調査の結果だけではどの段階の日本語カリキュラムに問題があるかを特定しきれない。また、本調査を通して日本語専攻学習者の学習意欲は学年が上がるにつれて低下していることが確認できたため、日本語カリキュラムは特定の段階で問題が生じているわけではなく、日本語カリキュラムそのもの自体に問題があると思われる。日本語カリキュラム全体のデザインを見直す必要があると考えられる。また、今回の本調査の結果からわかるように、日本語専攻学習者の動機づけは常に変化しているため、現在の日本語カリキュラムを考え直す際に、異なる学年の学習者の動機づけの特徴に合わせた日本語カリキュラムが必要であると思われる。

また、今回の調査は中国内モンゴル自治区の大学を中心に行ったが、中国における日本語専攻教育全体の状況を明らかにするためには、調査対象を増やす必要があるだろう。また、現在の日本語カリキュラムそのものに問題があることが今回の本調査を通して明らかになったが、現在の中国における日本語教育の日本語カリキュラム全体がどのようになっているかを調査した上で、各学年の日本語カリキュラムの現状を明らかにする必要もあると思われる。さらに、日本語カリキュラムを設計する際に、今回の本調査の結果が示しているように、日本語専攻学習者の動機づけが常に揺れ動いているため、その学習動機の変化をも考慮しなければならない。

## 参考文献

- Deci, E. L.& Ryan, R. M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- Deci, E. L.& Ryan, R. M. (2000) The " what " and " why " of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. *Psychological Inquiry* 11: 227-268.
- Dörnyei, Z. (1998) Motivation in second and foreign language learning. *Language Teaching* 31: 117-135.
- Gardner, R. C.& Lambert, W. (1972) *Attitude and motivation second language learning*. Newbury House.
- Gardner, R. C. (1985) *Social psychology and second language learning: The role of attitude and motivation*. London: Edward Arnold.
- Lukmani, Y. (1972) Motivation to learn and language proficiency. *Language learning* 22.: 261-273.
- Oxford, R. L. (1996) *Language learning motivation: Pathways to the new century*. Honolulu, HI: University of Hawaii Press.
- Ryan, Stephen. (2009) Self and identity in L2 motivation in Japan: The ideal L2 self and Japanese learners of English. *Motivation, Language Identity and the L2 Self*:120-153 Bristol: Multilingual Matters.
- 岡田涼 (2010) 「自己決定理論における動機づけ概念間の関連性 —メタ分析による相関係数の統合」『パーソナリティ研究』第 18 号 pp.152-160.
- 郭 俊海・大北葉子 (2001) 「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」『日本語教育』第 110 号 pp.130-139.
- 郭 俊海・全京姫 (2006) 「中国人大学生の日本語学習動機づけについて」『新潟大学国際センター紀要』第 2 号 pp.118-128.
- 田中祐輔 (2015) 『現代中国の日本語教育史 —大学専攻教育と教科書をめぐって—』国書刊行会
- 成田高宏 (1998) 「日本語学習と成績との関係：タイの大学生の場合」『世界の日本語教育』第 8 号 pp.1-11.
- 堀越和夫 (2010) 「台湾における日本語学習の動機づけと大学の成績との関係 —好成绩取得者の動機づけタイプの探索—」『淡江外語論集』第 15 号 pp.123-140.
- 守谷智美 (2002) 「第二言語教育における動機づけの研究動向：第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として」『言語文化と日本語教育』2002 年 5 月増刊特集号 pp.315-329.

劉海霞 .< 基国内日本語教育研究の発言与不足, 日本語学習与研究, 于十九種外国語類  
主要期刊十年 (1999-2008) 的統計分析 >, 《日本語學習研究》, 2009 年第 5 期